



①冬になるとザトウクジラが集まる沖縄県座間味村②ザトウクジラのジャンプ。なぜかプリーチングという

# 須磨海浜水族園 亀ちゃんの あっぱれ! 水の動物たち



## クジラ待つ冬の慶良間



# 出産・子育て 暖かい海で

そろそろ冬である。生物の世界でもいろいろなことが起こる。ハクチョウやカモやツルが飛んでくるのもこの季節だ。この時期にクジラを待っている島がある。小笠原(東京)と慶良間(沖縄)である。冬になると、この離島にはザトウクジラがやってくるのだ。

動物が長距離を回遊する理由は、餌を食べるのに有利な場所と、子供を育てるのに有利な場所の違によることが多い。つまり、繁殖と食事の好適地が違うのである。ザトウクジラのように全長が15メートルを超えて、体重も30トンの動物にとっては、餌の確保が大変だ。

海の中の生物量は、寒い北の海よりも暖かい南の海の方が多く、信じておられる皆さんも多いと思われるが、それは全く違う。生物量は圧倒的に北が多い。北海道に行けば、サケにニシンにホッキガイにケガニにタラバガニと、食通にはたまらなく水産物は多い。ところが、沖縄に魚を求めて行く人は少ない。圧倒的に寒い方が水産物が多いのである。



ホエールウォッチングの風景

寒い海に魚が多いのは、もちろんその気候に理由がある。気温が低いと、水面近くの海水の温度が低くなる。冷たい海水は重くなり、海面から海底に向かって水が下がって

いく。そのかわりに、海底の栄養分をいっぱい含んだ海水が海面に上がってくるのだ。栄養を含んだ海水が明るいところにくると植物性プランクトンが増殖する。そして、それを食べる動物プランクトンや魚なども多くなるのだ。ザトウクジラは哺乳類で恒温動物だから体の冷えない暖かい海の方が好きなのかもしれない。しかし、暖かい南の海には餌がない。そこで、餌の多い北のベリング海あたりでオキアミやニシンなどの餌を食べるしかない。ところが、そこは寒い。

大きな体をしたザトウクジラの親はまだ低温には強いが、問題は体の小さい子供だ。小さい体は冷えやすく、低温に弱い。生まれたての子供はなおさらだ。北の海では寒すぎる。そこで、出産が近づくと南に向かって泳ぎ、暖かい

海で出産をし、乳を与えて子育てをする。それが小笠原であり慶良間なのだ。慶良間諸島に座間味村がある。座間味島を中心いくつかの島があり、冬になるとその近海にザトウクジラが集まってくる。私が沖縄に住んでいた1980年代にはほとんど姿を現さなかったのだが、捕鯨が禁止され最近では多くのザトウクジラが島の周囲で冬を越すようになった。ザトウクジラのパフォーマンスは面白い。深く潜るときはしっほを出してから潜るし、長い胸ビレで水面をたたくこともある。若達者でクジラ見物するにはもってこいなのだ。春先、ウミガメの調査で座間味村を訪れた時、村長と話をする機会があった。この春、慶良間諸島は国立公園になったそう

### 特別展 「世界が恋する海! 座間味村!!」

来年2月15日まで。座間味に関する質問に答えていけば、座間味や沖縄の海の生物のことがわかります。ウミガメを食べるヘビ「アカマタ」も必見。

だ。だったら須磨海浜水族園で座間味村展をやるとういうことになった。この特別展に来ると南の島村、座間味村のすべてがわかることになっていく。



亀崎直樹 (かめざき・なおき) 1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園学術研究統括。元園長。岡山理科大学生物地球学部教授。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。